チャレンジ！！オープンガバナンス 2024 市民／学生応募用紙

自治体提示の地域課題名（注1）	No.	自治体提示の地域課題名	自治体名
			那覇市
チームがつけたアイデア名（公開）（注 2）	ウェルビーイングな地域づくり『結 HUB サイクル』		

（注1）地域課題名は、COG2024 サイトの中に記載してある応募自治体提示の地域課題名を記入してください。
（注 2）アイデア名は各チームで独自にアイデアにふさわしい名前を付けてください。これは自治体提示の地域課題名とは別です。

1. 応募者情報 下の欄のうち選択肢項目は右のドロップダウンで選んでください

チーム名（公開）	ミネコヤ	
チーム属性（公開）	1. 市民、2. 市民／学生混成、3. 学生 ドロップダウン選択➡	1.市民
チームメンバー数（公開）	8名	
代表者（公開）	宮道　喜一	
メンバー（公開）	土屋　恭子、内間　直子、神谷　あゆみ	

【注意書き】※　必ず応募前にお読みください。

＜応募の際のファイル名と送付先＞

1. 応募の際は、ファイル名を COG2024_応募用紙_具体的チーム名_該当自治体名にして、COG2024 のウェブサイトにある【応募フォーム】からアップロードしてください。

＜応募内容の公開＞

2. アイデア名、チーム名、チーム属性、チームメンバー数、代表者および公開に同意したメンバー氏名（メンバー一覧ページを参照）、「アイデアの説明」は公開されます。
3. 公開条件について：
「アイデアの説明」でご記入いただく内容は、クリエイティブ・コモンズの CC BY（表示）4.0 国際ライセンスで、公開します。ただし、申請者からの要請がある場合には、CC BY-NC（表示—非営利）4.0 国際ライセンスで公開しますので、申請の際にその旨をお知らせください。いずれの場合もクレジットの付与対象は応募したチームの名称とします。
（具体的なライセンスの条件につきましては、ttps://creativecommons.org/licenses/by/4.0/legalcode.ja および https://creativecommons.org/licenses/by-nc/4.0/legalcode.ja をご参照ください。また、クリエイティブ・コモンズの解説もあります。https://creativecommons.jp/licenses/）
4. 上記の公開は、内容を確認した上で行います。（例えば公序良俗に違反するもの、剽窃があるものなどは公開しません）
5. この応募内容のうち、「自治体との連携」は、非公開です。ただし、内容に優れ今後の参考になりうると判断したものは、公開審査後アドバイスの段階で相談の上公開することがあり得ます。

＜知的所有権等の取扱い＞

6. 「アイデアの説明」中に、応募したチームで作成・撮影したものではない文章、写真、図画等を使用する場合、その知的所有権を侵害していないことを確認してください。具体的には、法令に従った引用をするか、知的所有権者の許諾を取得し、その旨を注として記載してください。「自治体との連携」中も同様でお願いします。
7. 「アイデアの説明」中に、人が写りこんでいる写真を使用している場合、使用している写真に写りこんでいる人の肖像権またはプライバシーを侵害していないことを確認してください。

アイデアの説明が肖像権・著作権等を侵害していないことを確認してください。OKなら右欄の〇を選択 ➡	OK

＜チームメンバー名簿：メンバー一覧ページ＞

チームメンバーに関する情報を該当ページに記載して提出してください。（2. の扱いによる代表者氏名を除き、他のメンバーに関する情報は本人の同意があるものを除き COG 事務局からは非公開です。詳細は最終ページをご覧下さい。）

アイデアの説明は（1）アイデアの内容（活動）、（2）アイデアの理由（なぜなら）、（3）実現までの流れ、の三項目あります。それぞれ書いてください。必要に応じて図表を入れていただいて結構です。

（1） アイデアの内容（公開）

アイデアは、対象とする課題解決のために、どのような社会的活動（サービス）を行うのかを具体的に示してください。

2．アイデアの説明（公開）

(1) アイデアの内容（公開）

将来実現した場合に、新規性があり、実践したくなり、魅力的でわくわくするようなアイデアを求めます。その結果、課題が解決され、社会に良い変化をもたらすことが期待されます。2 ページ以内でご記入ください。

2．アイデアの説明（公開）　(1) アイデアの内容（公開）

※応募チームとして解決したい課題のポイントを、以下にごく短く書いてください

＜解決したい課題のポイント＞

市民一人ひとりが、よりよく生きるための選択肢を持つための、
ウェルビーイングな地域づくりサイクルの構築

・小学校区まちづくり協議会を通じた市民参加機能の補完
・「担い手の発掘と育成」、「地域の課題解決の取り組みの創出」などの課題解決につなげる

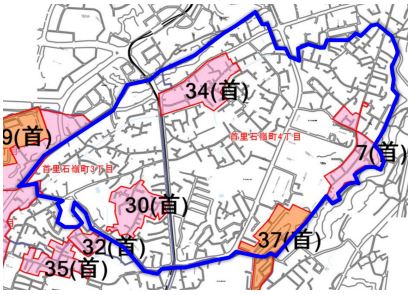
※以上の課題解決のために『何』をするアイデアか、それを『だれ』が『だれ』に対して『いつ』『どこで』『どのように』行うのか、受益者自身が主体的に関わる視点も視野に入れてわかりやすく書いてください。アイデアが具体的に実行される場面を想定し、説明をお願いします。

＜提案するアイデアの内容＞

1．アイデアの概要

自治会空白エリアが 88%の石嶺小学校区域。地域の社会的孤立問題

那覇市は、自治会の未組織地域率が高く、自治会加入率は **14.5%**（那覇市全体 2024 年 5 月現在）である。その中でも、石嶺小学校区域（石嶺町 3 丁目・4 丁目）は、自治会加入率 **6.4%**、校区内の自治会空白エリアが**約 88%**となっている（右図・青枠内）。



石嶺小学校区域で活動する中で、地域に暮らす多様な市民が、コミュニティ（共通の目的や興味、地域などによって結びついた人々の集まり）に参加する機会が一部に限られており、つながりの希薄化や社会的孤立が進行している。

コミュニティへの参加機会の拡充が地域の課題

私たちが考える、ウェルビーイングな地域は、多様な関わりやつながりの選択肢が豊富にあり、自分にあった関わりを知り、選択できる環境があること。また、地域住民一人ひとりが多様な関わりから地域活動へ主体的に参画しており、ゆるいつながりの中で住民がそれぞれのより良い生き方を実現している状態にあることである。石嶺地域に住む一人ひとりがよりよく生きるための持続可能な地域づくりに向けて、コミュニティへの参加機会の拡充が地域の課題となっている。

地域づくり活動を“補完する”「石嶺小学校区まちづくり協議会」

那覇市は、小学校区内の様々な主体が緩やかに連携し、地域の課題解決を図ることを目的とした、地域運営組織「小学校区まちづくり協議会」（以下、校区まち協）を推進している。ミネコヤが活動する石嶺地域では、2010 年に石嶺小学校区まち協が設置され、14 年が経過し、校区内の多様な活動をつなぎ、地域づくり活動を補完する役割を担っている。一方で、メンバーや活動内容の固定化、活動の周知、役員の世代交代、より多様な団体やコミュニティとの連携など課題も見えてきている。

住民一人ひとりが、よりよく生きるための選択肢を持つための『結 HUB サイクル』

ミネコヤでは、校区まち協の「地域課題解決」と「住民参加」の機能を補完する役割を担い、コミュニティへの参加機会の拡充の仕組みとして、『結 HUB サイクル』を構築する。このサイクルは、地域の人々が何らかのコミュニティへ参加する第一歩として、団体・活動情報を提供し、地域の活動を身近に感じ、誰もが参加しやすい環境を整える。合わせて、コミュニティ同士の出会いと多様なつながり、協力の輪を広げ、地域全体で課題解決に向けた新たな取り組みが生まれる仕組みをつくる。

2．結 HUB サイクルの仕組みについて

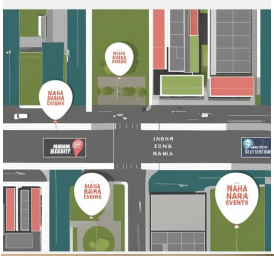
❶【お互いを知る】団体活動発表会①

石嶺地域で活動する団体活動発表会を年 2 回開催する。第 1 回は、各団体がこれまでの成果や今後の活動計画を共有する機会を設けることを目的として開催する。この場では、他団体との連携やコラボ企画の可能性を検討し、新たな協力関係が生まれるきっかけを提供する。

2．アイデアの説明（公開）　(1) アイデアの内容（公開）

開催月：毎年 7 月（各団体の年次総会後）／開催場所：那覇市石嶺公民館 2 階ホール

❷【活動情報の可視化・共有】イベント・活動情報マップ



地域のイベントや活動情報をマッピングし一目で把握できる地図情報アプリを導入する。この取り組みにより、各団体の活動やイベントが視覚的に整理され、住民が関心のある情報を簡単に見つけられるようなる。例えば、地図上に活動場所や詳細を示すことで、参加のハードルを下げ、より多くの人々がイベントに足を運ぶきっかけを提供していく。この仕組みは情報格差を解消し、地域全体のつながりづくりの重要な一歩とすることができる。

❸【活動情報の共有】オープンチャット、朝食会

各団体・コミュニティが参加するオープンチャット（オンライン）を展開する。気軽に活動内容やイベント情報を知ることができ、双方向のコミュニケーションが可能になる。例えば、地域の子供の居場所団体や旗頭（歴史文化）活動グループがそれぞれ専用のチャットを開設することで、興味を持つ人々がリアルタイムで情報を得ることができる。また、異なるコミュニティ間の交流も生まれ、活動への関心を広げ、より多くの参加者を促す効果が期待される。

顔を合わせて情報共有を図る場として「朝食会」を開催する。対面でのコミュニケーションを図りたい人やデジタル弱者の選択肢をつくる。

❹【企画づくり】団体活動発表会②

第 2 回目は団体・コミュニティ同士の 1 年間の取り組みを共有し、次年度、一緒に取り組めることを話し合い、企画をつくる。

開催月：毎年 2 月（次年度の活動計画をつくる前）／開催場所：那覇市石嶺公民館 2 階ホール

❺【協働】各団体同士のプチコラボ／資金支援

石嶺地域で活動する団体・コミュニティ同士が協働して取り組む企画に対して、地域からの寄付を募り、1 件 5 万円の資金支援を行う。お互いの活動内容を知り、これまでつながれなかった人とのつながりを得て、活動の幅が広がり、より多くの人々に情報が届き、新しい参加者や支援者の獲得につながる機会を創出する。実例として、石嶺中学校とミネコヤのコラボでは、「協働」を学ぶ授業で、生徒に地域活動を伝えることで、興味・関心を持ち、ボランティアで地域活動に参加するきっかけとなった。

3．期待される効果

地域住民が参加の選択肢を持ち、ウェルビーイングを意識する　・・住民個人

地域のつながりや活動に興味を持ち、参加する人が増える。また、住民同士の交流が深まることで、つながりの価値を実感し、個人としてのウェルビーイングを意識できるようになる。

石嶺小学校区まちづくり協議会のあらたな担い手の発見・発掘　・・石嶺まち協

地域活動の参加者が増えることで、多様な個人・団体が地域につながれるようになり、石嶺小校区まち協を知る人が増える。新たなまち協の活動に参加してみたい！という人を発見・発掘できる。

各団体の持続可能な活動への展開　・・各団体

『結 HUB サイクル』の中で、各団体同士が、お互いの運営方法や取り組みを知り、一つの企画を一緒に作り上げることで、相互に影響し合い、学び合うことで、団体運営のスキル向上や協力関係の強化、持続可能な活動基盤を築くことにつながる。

那覇市のコミュニティ施策への展開　・・那覇市

結 HUB サイクルは、各校区で活用できるスキームのため、石嶺小学校区から他の校区へ展開できる可能性が期待できる。

2．アイデアの説明（公開）　　(2) アイデアの理由（公開）

(2) アイデアの理由（公開）

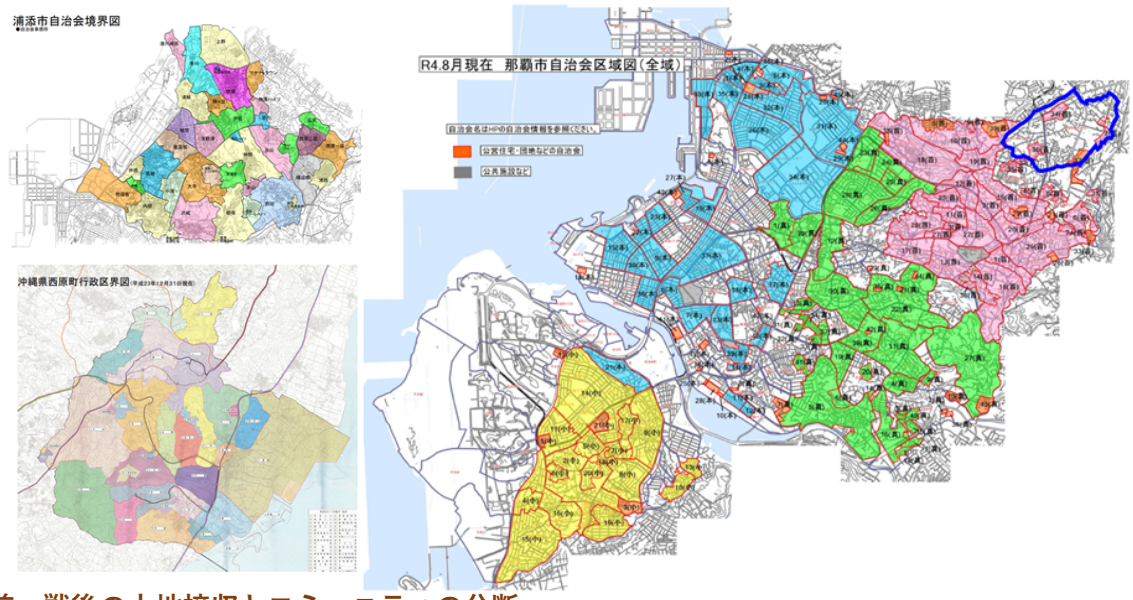
次にアイデアを提案する理由（なぜ）について、それをサポートするデータを根拠として示しつつ 2 ページ以内で説明してください。ここではアイデアの必要性、効果を確認します。データとは、統計類などの数値データやアンケート・インタビュー・経験の記述、関連の計画、既存の施策などの定性データも広く含みます。データは出所を明らかにしてください。

※このアイデアを提案する理由（なぜ）を書いていきます。
※先に書いた『何を』『だれが』『だれに対して』『いつ』『どこで』『どのように』というアイデアの内容を支えるために、『なぜ』このアイデアが有効で、実現する意味があるのか』を、上記のデータを使ってわかりやすく説明します。

理由１：那覇市特有の歴史的背景と経緯から、コミュニティの再構築が必要だから

那覇市の住民組織の結成は県内外に比べ複雑であり、戦後、那覇市全域が米軍用地として立入禁止となり、住民が収容所からの生活を強いられたこと等に強く影響を受け、現在も、地縁の基盤が脆弱な状況である。下図の石嶺地域が隣接する浦添市や西原町のような、自治会が住民の現住地の町・字を単位に、市全域において、かつ全住民を包括する形で組織されるという、いわば町内会・自治会組織の基本型からかけ離れており自治会未組織地域率が高く、自治会加入率においては 14.5％である。

特に石嶺地域は、戦後各地域から集まった人々が畑を切り開きできた地域のため、地域の歴史も他地域に比べると浅くコミュニティの形成が難しい地域であり、つながりの希薄化や社会的孤立が進行していることがわかった。「社会的孤立」は、個人の心身の健康や生活満足度を低下させるだけでなく、地域全体の活力を損なう要因ともなる。



－戦前・戦後の土地接収とコミュニティの分断

戦後、米軍による土地接収が行われ、多くの住民がもともと住んでいた地域コミュニティに戻れなくなった。この結果、地域の伝統的なつながりが断たれた。

－戦後の人口再流入と郷友会的なコミュニティの形成

戦後しばらくしてから、本島内外や離島から那覇市への出稼ぎなどがきっかけに人々が増え、出身地に基づく「郷友会」的なコミュニティが形成された。しかし、これらの郷友会的つながりは、地域単位ではなく出身地に基づいて構築され、本土の町内会や自治会の役割とは異なる経緯で形成された。

こうしたコミュニティ形成は、自治会の設立を代替する形となり、地域に根差した自治組織の発展が進まなかった。都市化が進行し、伝統的な「近隣共同体」の意識が希薄化した可能性がある。

－1990 年代の自治会の状況：ゴミ回収政策の課題

本土では、自治会加入率の高さを維持する要因の一つにごみの集団回収があるが、那覇市では、戸別回収となっている。戸別回収の導入についても、戦後の混乱期に、ゴミを置く場所（ステーション）が管理者不在のまま、住民により無秩序に作られたため、排出者の特定がでず、これにより市外からのごみ投棄も多くなり衛生面の観点からも大きな問題となったことから、那覇市はゴミの回収を 2000 年に変更するが、自治会やコミュニティの希薄さが障害となり戸別回収にせざるを得なかった。

－今後の展望

地縁組織の希薄さや郷友会の分散と衰退などの那覇市が抱える課題を解決するには、地縁のつながりに頼らないコミュニティの再構築が鍵となる。既存のまちづくり協議会を活用しつつ、都市化した環境でも機能する新しい形の自治組織の構築が求められることから、住民の興味に基づくコミュニテ

ィづくりが、希薄化したつながりを補う方法として有効であると考える。

理由２：石嶺小学校区において、地域活動等のコミュニティへ参加できる機会が少ない、あっても知られていないから

2023 年 2 月 4 日（土）に開催された「石嶺小学校区地域円卓会議＜テーマ：石嶺小学校区における高齢者の孤立問題とコミュニティのあり方を考える＞」（主催：石嶺小学校区まちづくり協議会、那覇市まちづくり協働推進課）において、次のことが明らかとなった。

- 石嶺小学校区（石嶺 3・4 丁目）の人口 12,827 人、4,796 世帯、65 歳以上の単独世帯 470 世帯。（令和 2 年国勢調査より）
- 石嶺小学校区の高齢者を取り巻く状況として、自動車免許返納に伴う買い物・通院の不便、認知症による道迷いや詐欺被害、自治会のない地域の状況が見えない、戸建て住宅での高齢独居・高齢夫婦世帯の増加などがある。
- 高齢者の見守りを行う「地域見守り隊」や買い物支援、市民の有志によるコミュニティ（ラジオ体操、ミニデイサロン等）の取り組みがある一方、個々のコミュニティ同士のつながりが薄い。
- 高齢者を支える様々な取り組みがあるが、孤立している方には届いていないのではないか。
- 現状は元気で、地域とのつながりを望んでいない方に対しても、今後つながりが必要になるかもしれないため、関わりを持つべきではないか。曖昧さ、ゆるさをもったコミュニティがあるとよい。

理由３：石嶺小学校区まちづくり協議会の地域運営機能が限定されているから

石嶺小学校区まち協があることで、生まれた活動や解決された地域課題がある一方で、いくつかの課題が明らかになっている。

- メンバーや活動内容の固定化により、新たな参加者やニーズに基づいた活動・事業が生まれにくい。特定の人々や活動に依存する構造が生じ、地域全体を巻き込む取り組みが停滞している。
- 新しい団体や活動、個々の小さなコミュニティとつながることが難しく、地域内の交流が限定的となっている。また、地域外の人や組織、ノウハウとつながることが難しい。

理由４：那覇市内の他の小学校区へ展開できるから

那覇市では、小学校区を圏域としたコミュニティづくりを推進して 10 年以上経過し、現在小学校区まちづくり協議会が 15 校区、準備会が 3 校区設立されている。多くの既存のまち協の悩みとして、新たな担い手の確保と、関係人口の拡大、新たな活動の広がりがある。「結 HUB サイクル」は、これらの課題を補完する仕組みのひとつとして、団体同士や人材との連携を促進し、地域全体の協働を深化させる可能性を持っている。この仕組みを、石嶺小学校区から他の校区へ展開・活用することで、地域資源を効果的に循環させ、持続可能な地域コミュニティの形成が期待できる。

(3) アイデア実現までの流れ（公開）

アイデアを**実現する主体**、アイデアの**実現に必要な資源（ヒト、モノ、カネ）の大まかな規模とその現実的な調達方法**、アイデアの**実現にいたる時間軸を含むプロセス**、実現の制度的制約がある場合にはその解決策を含め、**アイデア実現までの大まかな流れ**について、**2 ページ以内**でご記入ください。ここでは実現可能性を確認します。

※アイデアに即した実現に向けての具体的な活動を上記のポイントに即して工夫して書いていきます

＜以下のように分けて書いていきます＞

1．実現する主体
2．実現に必要な資源（ヒト、モノ、カネ）の大まかな規模とその現実的な調達方法
3．実現にいたる時間軸を含むプロセス

1．実現する主体：ミネコヤ
協働のパートナー：石嶺小校区まち協、那覇市役所

2．必要な資源

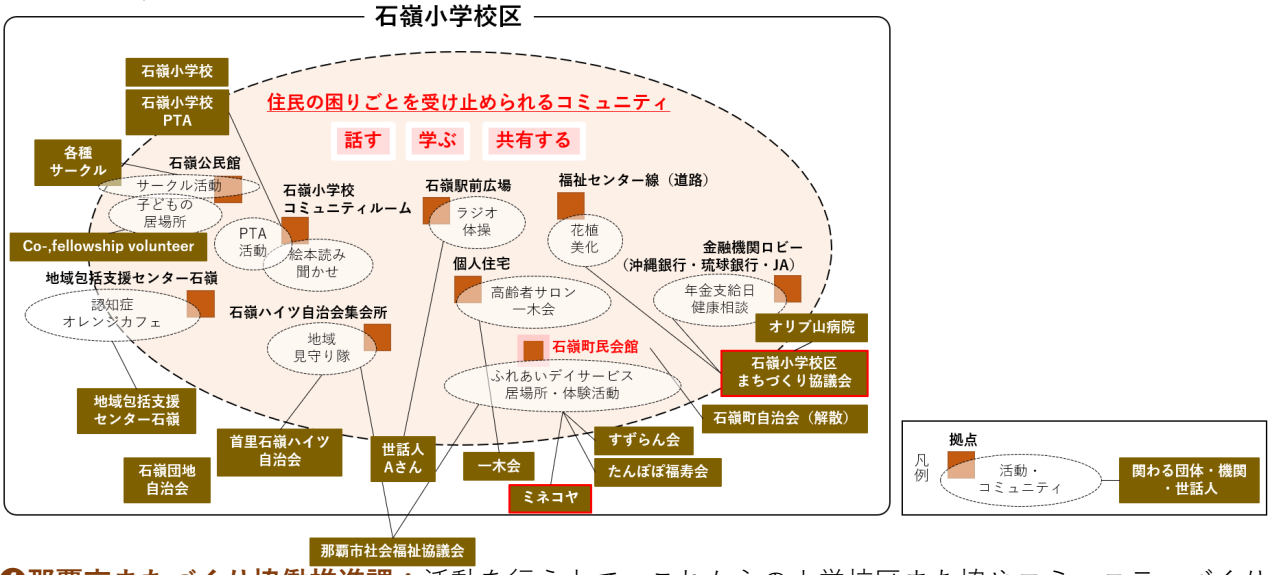
【ヒト】

❶石嶺小学校区の住民：これまで石嶺小学校区まちづくり協議会が各種活動をとおして地域住民とのつながりづくりを行ってきている。これをベースとして 2023 年度になは市民協働大学院首里チームと地域の有志で構成された団体を 2024 年 4 月に「ミネコヤ」として発足。「ミネコヤ」では現在、こども高齢者を対象としたイベントを開催し認知度向上を図っている。イベントを通して地域住民との新たな関わりが生まれている。

❷ミネコヤ：実現する主体である石嶺小学校区を主な活動の範囲としている団体。地域に関わる人々の素敵なふるさとづくりに関する活動を行うことにより、自他ともによりよく生きる地域をづくりを目指している。団体設立した 2024 年度は子供を中心として、石嶺地域内外の多様な人たちとの体験できる機会をイベントを通して実施している。今後、地域の「市民型シンクドゥタンク」団体となることも視野に、2025 年度は結 HUB サイクルの構築に向けた取り組みを展開する。

❸石嶺地域の活動団体

なは市民活動センターへの市民活動登録団体数は 260 団体である。その中で、石嶺小学校区に拠点を置き地域で活動している団体は地域に 11 団体あり、校区まち協で連携している未登録の団体は 8 団あり、20 団体が活動をしている。石嶺小学校区のある首里エリアは 5 つの小学校区に分かれている。首里エリアの市民活動登録団体数は 54 団体となっており、石嶺小学校区の活動団体は比較的多いことがわかった。



❹那覇市まちづくり協働推進課：活動を行う上で、これからの小学校区まち協やコミュニティづくりの方向性の情報共有を行いながら持続可能なコミュニティづくりを連携していく

【モノ】

❶ 情報発信のための地域のポータルサイト：マッピング・可視化ツールなど
❷多様な人がつながる仕掛けのアドバルーン：プチコラボや結 HBU サイクルに関わるイベント時にア

ドバルーンを活用する。この象徴的な取り組みにより、地域の人々が自然と楽しく活動に参加し、つながりを実感できる
【カネ】なは市民活動支援助成金を含む各種助成金、その他寄付金
ミネコヤは 2024 年度　なは市民活動助成金及び地域の寄付金を得て活動中。2025 年度以降、まちづくり寄付金などを募っていく予定。

3．プロセス

2025 年 2 月　テーマ別交流会
　　こども（石嶺公民館、スバコ、放課後居場所）
　　ウェルビーイング指標調査開始　毎年更新
2025 年 4 月　オープンチャット　プラットホーム運用要調査
2025 年 8 月　テーマ別プチ交流会実施　プラットホーム運用開始
2026 年 1 月　第 0 回　団体活動発表会
2026 年 5 月　プチコラボイベント実施開始
2026 年 8 月　団体交流会
2027 年 1 月　第 1 回　団体活動発表会
2027 年度　　プチコラボイベント 2 回実施
2028 年度　　プチコラボイベント 5 回実施
　3 年後には　プチコラボイベントが毎月 1 回以上地域で開催されており、地域の人が結 HBU 活動に参加した際に、アドバルーンで認識できるようになっている。